

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.1 January 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



1

CONTENTS

- ・ 巻頭言
ブラジルの天理教 ②
／永尾 教昭 1
- ・ 「おさしづ」語句の探求（最終回）
「おさしづ」における「道」の用例まとめ②
／澤井 治郎 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌（5）
天理教教理における海外伝道について（2）
／山西 弘朗 3
- ・ 特別寄稿
バゼビバカ・ピエール会長追悼
／森 洋明 4
- ・ ライシテと天理教のフランス布教（27）
20世紀のライシテ③
／藤原 理人 6
- ・ 宗教伝統における聖典の意味構造（10）
シャンカラ派の聖典解釈と「出家遊行」
／澤井 義次 7
- ・ 現代宗教と女性（34）
技能実習生と日本社会
／金子 珠理 8
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播—（19）
5. コロンビアの体質 10
／清水 直太郎 9
- ・ 2021 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（7）
第3講：130「小さな埃は」
／尾上 貴行 10
- ・ おやさと研究所ニュース 11
第16回国際哲学会議で、本学の教授2名が招待講演／第344回研究報告会／第46回オーストラリア宗教学会年次大会にて発表／2021年度公開教学講座のご案内

巻頭言

ブラジルの天理教 ②

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

1929年ブラジルに渡った大竹忠治郎は、筆舌に尽くしがたい艱難の道中を通り天理教の布教に専心する。

まず異国で布教伝道することの困難さ以前に、当時のブラジルにおける日本人の暮らしそのものが悲惨な状態であった。マラリアや破傷風、アメーバー赤痢などに苦しみ、多くの人が命を失った。とりわけ乳幼児死亡率が高く、1925年にパラナ州カンバラ市の集落に入植した日本人は50家族未満であったが65人の死亡者を出しており、そのほとんどが子供であったという。また、1930年から35年の5年間には同集落に約250軒の日本人家族が暮らしていたが、390人の死者を記録している⁽¹⁾。一家族の構成人数がわからないので正確に把握することは難しいが、かなり高い死亡率であることは間違いないだろう。

そんな中でも大竹の布教意欲はいささかも衰えることなく、1936年にちばで執行された教祖50年祭を目指して、前年におぢば帰り団参を実現する。これがブラジルからの初めての帰参団体であった。さらに1937年の立教百年祭にも団体を組織して帰参している。言うまでもなく、当時は今と違って船旅である。1935年の団参はブラジルから日本まで片道2ヵ月かかっている。つまり往復するだけでも4ヵ月かかることになる。それを3年で2回実施しているのだから、天理教信者のちば信仰の堅固さがわかる。

大竹の生涯でその身が最も危機に瀕したのは、先の大戦中だろう。1942年1月ブラジルは枢軸国（日独伊）相手に参戦する。それに伴い当然日本とブラジルの国交は断絶となり、在伯日本人はドイツ人、イタリア人とともに当局の激しい弾圧を受ける。そして当地の天理教の指導的立場にあった大竹は、1942年3月17日から1年3ヵ月、サンパウロの獄舎に収監されることとなる。その獄舎でもトイレ掃除を率先して行うなど、ひのきしん（神

への感謝を行動に表すこと）に励む。まさに、大竹の白熱の布教活動は留まるところを知らなかった。

そうした中でも、異国の地ならではの障壁があった。それは、言葉の問題である。大竹が派遣元の南海大教会に送った手紙がある。

「初めて外人（ブラジル人＝筆者注）のお婆さんに匂いがけ（布教＝同）を致しましたが、日用の会話も不自由な時ですから此処でも奥の手を出して、手真似身振り今思ひだすとプツと吹き出すことがあります。…漸く相手に通じてお助けをさせて頂いた時は、本当に涙が出る程嬉しかったものです」とある。相手の素性を知らずに布教したこの高齢の女性はカトリックの布教師であったようだ。同じ手紙には、店で便箋一つ買うのに散々苦勞したことも記されている。

異国で人に教理を伝え信仰に導くためには、その国の言葉が話せることは必須だ。筆者も約25年間、フランスで布教生活に勤しんだ。筆者の場合、大学でフランス語を履修し、さらに彼の地でも学校に行ったが、それでも難儀した。大竹の場合、まったくポルトガル語の素養もなく、無論、現地の学校に通うなど到底不可能な当時の情勢であった。その困難のほどは推して知るべしであろう。

言葉の問題を完全に払拭するには、ブラジルではブラジル人が、フランスではフランス人が布教すればよいのである。そして、それは彼らにとって「海外布教」ではなく「国内布教」だ。つまり、まず海外布教から国内布教に移行して、そこから初めて異文化圏伝道という段階に挑戦していくことになるのだと思う。

〔註〕

- (1) 矢持善和『親ひとすじ—大竹忠治郎の「手記」解説—』（養徳社、平成24年）
- (2) 『南海大教会史 第3巻』（天理教南海大教会史料集成部、昭和51年）